

一第76編一 バンコクの水上住居

バンコクのチャオプラヤ流域^{*1}に残る水上住居である。陸から、水上の船から眺めると、一見バラックの集合のように見えるこの住まいに、様々な工夫と暮らしの知恵が隠されていることが発見できる。これらの住まいについて、建築家A・ジャムサイ^{*2}は次のように簡

潔に記述している（西村幸夫^{*3}訳）。

『…水上住宅の場合、竹のいかだあるいは箱舟の上に建てられ、河や運河に係留されることになる。こうした水上住宅がもつとも集中したのは18世紀末から今世紀初頭にかけてのバンコクであった。…正面は河に面し、取りはずしが可能なパネルで構成され、昼間は河からの風を入れるために開放されている。前面のベランダは、朝夕は水浴び、日中は店として使われる。中央部分は就寝に、岸側の一間は調理と食事のスペースとなる。…両生的かつ水上―潮流型の住宅のこうした柔軟性と可動性は、効率の良さ^と計画性のなさが前提になっている。実際に水



写真76-1 バンコクの水上住居

上に浮かんでいようと、高床であろうと土間式であろうと、家の中には永遠で、固定して、重く、余分であるようなものはない。』（「水の神ナーガ」鹿島出版会、1992）

ジャムサイが言うように、水上住宅の本質は軽い構造と建具で構成され、住み手自らの作業によって可動であることだ。したがって、家の中には敢えて永遠のものは持たない。いつ何時やってくるかもしれない水や風の災害に対処するために、全てを軽く、自分で取り外しできるように設える。これは、我が国で3・11以降声高に叫ばれる巨大で強靱な土木的構造体で物理的に乗り切ろうとする策とは対極にあると言えないだろうか。すなわち、住まい・まちの持続可能性や住み手の安全保障を、ローコストで確保するための一つの在り方であるとも見ることができている。

もちろん、それを実現するにはここに見られるような気候風土に基づく生活文化の歴史が大前提である。しかし、そこから全く遠い現代社会の重装備なライフスタイルに慣れきった私達が学ぶべきしなやかな要素があることを、もう一度考えてみる必要があるのではないか。近年、各種の災害が日常的に発生するなかで、そこにはこれからの住まい・まちの原点を探るうえで、大切なヒントが含まれているように思われるからである。これは、広く東南アジアに共通する未来的な課題である。



写真76-2 水とともにある生活

*1

Chao Phraya: ベンコクを中心に流れる河川

*2

Sumet Jumsai
(1939): タイの建築家、理論家、作家

*3

西村幸夫(1952)
(東京大学大学院教授(都市計画))